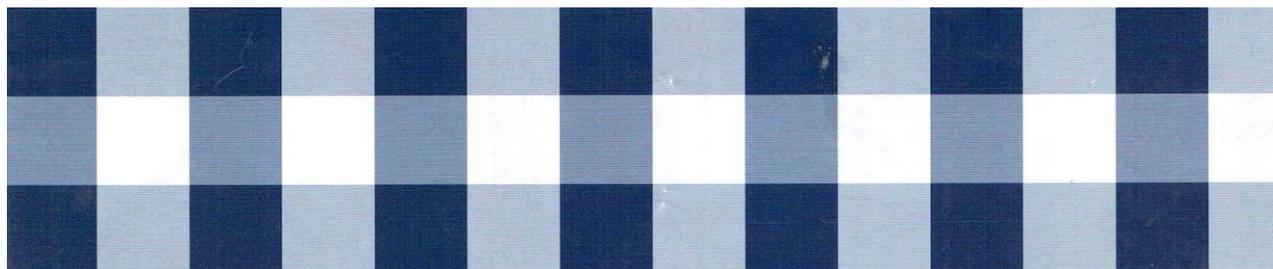


まってるすけ高柳

「弁慶縞の藍にこれからの高柳の夢を見る」

門出和紙 小林 抄吾



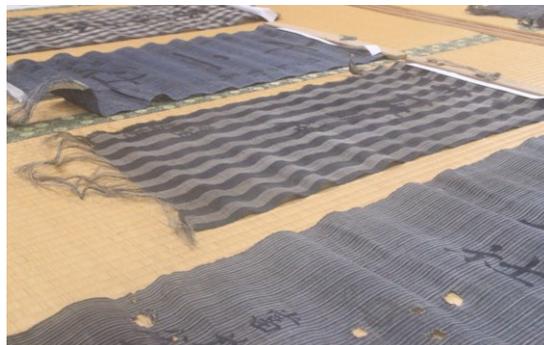
○高柳には『弁慶縞』と呼ばれる苧麻（チョマ＝カラムシ）で織られた越後ちぢみの縞（かすり）模様がかつてありました。現在の田代地区で寛正年間（1800年代）から明治の中頃まで織られていたとみられ、十二神社に保管されていた奉納幡（のぼり）は現在、柏崎市の文化財に指定されています。『2009年狼煙プロジェクト高柳』にて行われた弁慶縞の再現でご記憶の方もおられるかと思います。

○この弁慶縞、鈴木牧之（ぼくし）の『北越雪譜』（1837）に「紺の弁慶縞は高柳郷に限る」と書かれていることから牧之の生きた時代には当時の越後縮のブランドのひとつとして名を馳せたのだらうと思います。ところが不思議なことに縮のことを記した同時代の他の書物には「弁慶縞」のことが出てきません。おそらく流行り廃りの目まぐるしい縮の縞模様の中で何度も産地が変わり、弁慶縞もやがて流行から外れ、織る人もいなくなってしまったのでしょう。現在も越後縮の産地である小千谷市を訪ねてみましたが、高柳の弁慶縞はおろか、北越雪譜に記載のあった縞模様を知る人は少なく、少しさびしい思いがしました。

○ここ数年、趣味で仲間と藍染めに取り組んでいる私としては、弁慶縞を染めている藍がどんなものだったのかもとても興味があります。当時の藍染めとはどんなものだったのか。『高柳町史』には記されていませんが、高柳の各地域に「こんや」「こうや」といったように藍染め師を意味する「紺屋」を屋号としている家がいくつか残っています。

おそらく産業とはならずとも地域内でのちょっとした衣服の染物にと各集落に藍染めをする人たちが少なからずいたのでしょう。日照量の少ない新潟では藍の栽培は不向きとされていたことから、藍の一大産地であった阿波から北前船を通じて藍玉（藍染めの元）と藍染めの道具を買い、それで染めていたものと考えられます（裏面に続く）

弁慶縞の奉納幡。百年以上経っても色褪せていない。



家の畑の一部を借りて藍を栽培している。